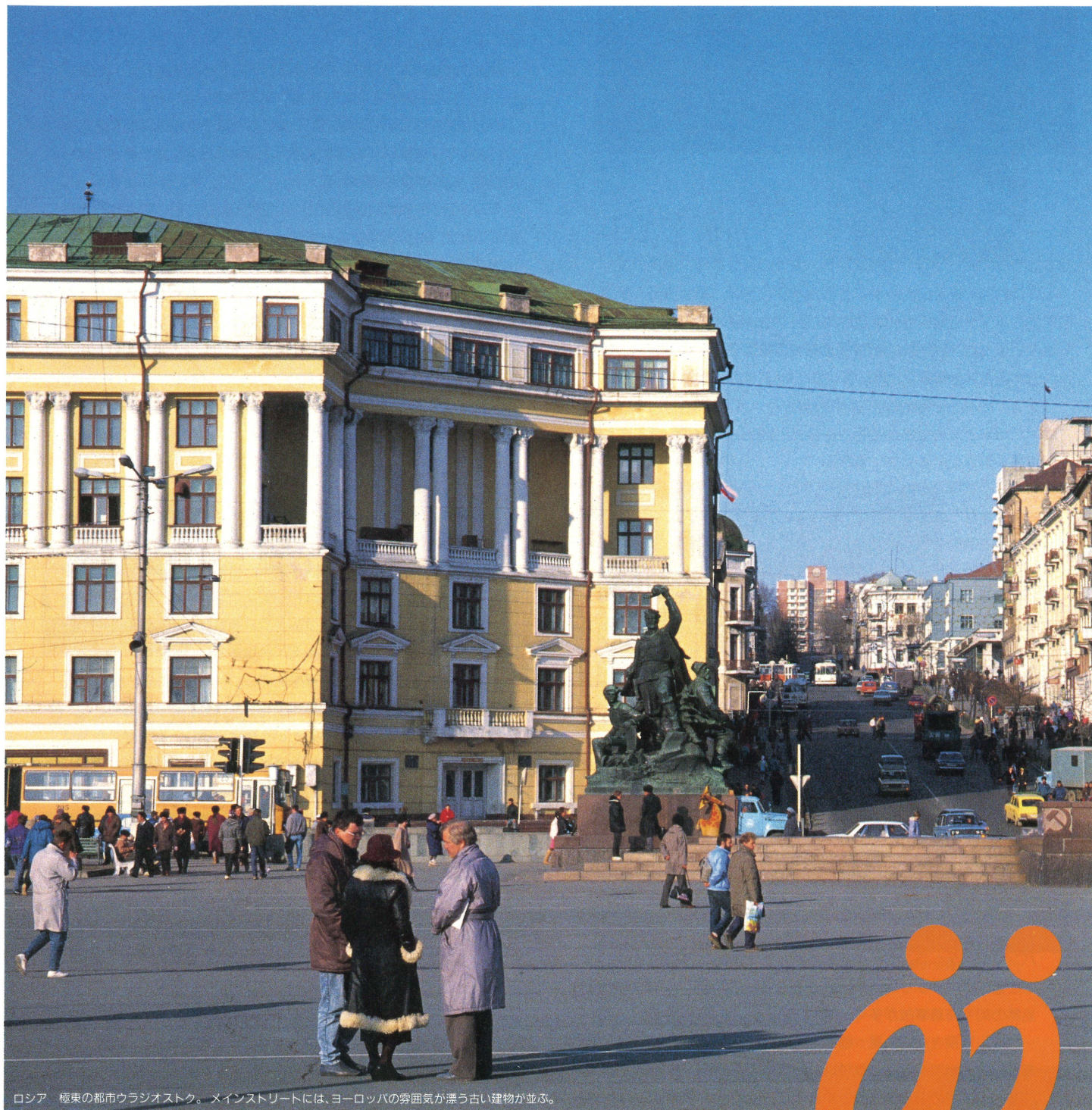


# Asian Breeze



ロシア 極東の都市ウラジオストク。メインストリートには、ヨーロッパの雰囲気漂う古い建物が並ぶ。

いま、女性たちは——WOMEN TODAY——	2
フォーラムの財団法人化	3
フォーラムの活動紹介	4
海外通信員レポート	7
海外情報 モンゴル、チリ	10
フォーラムの窓	11

わ  
KFAW

NOVEMBER 1993 No. 9



# いま、女性たちは——WOMEN TODAY——

## アジア女性として学ぶ



脚本家

小山内美江子

「同じアジア人だものネ」

ヨルダンの難民キャンプでのこと、私は思わず相手の顔を見直してしまった。目が優しいが中東の男性の象徴である濃々とした髭が、もみあげから顎まで見事に覆っている。

なるほど、中東と名付けたのはヨーロッパ人であって、ヨーロッパに近いアジアだから近東、中ぐらいにあるから中東、そして日本は東の端っこにあるから極東なのか…と、この年になってはじめて納得した次第である。

イランはその中東にあるが、ペルシャ語を使うので、アラビア語を使う近隣国からアラブ人ではないと言われるけれど、宗教はその大多数の国と同じイスラム教で、戒律は厳しい。

女性は、外国人といえども、顔と手首から先しか他人に見せてはならず、1991年、夏、イラクとの国境にあるクルド人難民キャンプに向った時のテヘランはどうしようもなく暑かった。

イラン航空機に乗ったとたん、体の線が分からないようにと黒い長いレインコートのような服に黒い被りもののスチュワーデスに迎えられ、ああ、やっぱりと思ったものだ。

それでもその頃、首都ではスカーフから前髪が少しのぞくのはよしとされ、若い娘さんたちは、前髪のをぞき具合に工夫を凝らして、精一杯おしゃれを楽しんでいた様子だった。

被りものは、厳密には黒でなくてもよいとは聞いたけれど、既婚者、それも中年女性となれば圧倒的に黒を着用し、しかも、頭のてっぺんから踵まですっぽりと覆うチャドル姿が多くなる。

それにしても空港から市内への車の多さに驚かされる。メキシコ、バンコク、テヘランの三大交通渋滞と謳われるのは事実で、荒っぽさと猛スピードぶりは凄まじい。その上、ひんぱんにおきる停電。当然の如く交通事故が多く、犠牲者には成人女性が多いのだ。

想像して頂きたい。真っ暗な町角から、チャドルで全身を覆った黒い人影が出てくれば、気付いた時はハネているという事だ。

その後、締めつけがきびしくなり、前髪たらしは御法度、禁を破った娘に百叩きの刑が復活している。チャドルの色も限定はされていないものの、体制がそれを望んでいると察知すれば、体制の好む色に合わせるのが庶民というもので、決して他国の宗教、戒律に干渉するものではないが、結果、死亡事故によって母を失った子どもを思うとやはり暗然となる。

中東では女性の位置が低いと言われるが、一旦家の中に入ると、黒いコートを脱いだ彼女らの服装は実にカラフルで、男性たちも家

を手伝って優しいのだ。

宗教は政治問題であり、むずかしいことではあるのだが、戒律を守りながら交通事故などの理不盡な死に合わないためにどうしたらよいのかと、はじめて救援活動に参加した女子学生たちは考え込んでしまった。隣国トルコで女性首相が誕生した時、声をあげて喜んだのも、その女子学生である。

ボランティアとは、援助するつもりであったのが、実は各地の現状にふれて、さまざまなことを教えられ、学ぶ機会である。

その翌年、タイ国境キャンプからカンボジア難民の帰還がはじまった頃、プノンペンでは、まだ建物も人びとの着物も全体にくすんでいたが、その一角に住む女性たちは愛らしいともいえるピンクを着ていた。勇を鼓して彼女らに彼女ら自身の値段を訊いてみる。

「ショートタイムで 2ドルよ」

「2ドル!?」

と私も女子学生も絶句する。当時のレートで250円。

「でも大丈夫、UNTAC景気だし、そのうち日本の兵隊さんも来るから、もっと値上りするワ」

それは良かったわネとは私たちには言えなかった。事実、その後、彼女らの値段は上がったが、エイズ感染のデータも出はじめる。

性を売るといっても、家族を養うためだから、彼女らには特別な罪悪感はない。むしろ愉快なビジネスではないと、同じ年代の女子学生は思うが、親に家でもプレゼントすれば美談にもなるという事実、私の若い仲間は頭を抱え、討論する。

ここでも性急に私たちの倫理感を押しつけるわけにはいかないが、エイズの危険は彼女らが愛する家族をもまき込むことになる。

大いなる原因は貧しさにあるという結論に達し、女子学生たちは何をすべきかと考える。そういう若い仲間は私は大好きだ。

はじめて参加した救援活動の時、看護学校の生徒であったAさんは、今年の夏、極東ロシアの困窮独居老人や乳児院へ救援物資手渡しのプロジェクトでは、一人前の立派な看護婦として同行した。

簿記の資格を生かし、タイ北部のボランティア団体へ1年間参加した娘さんもいる。都会での売春に流れないよう、現地で現金収入を得るために技術指導を行うというプロジェクトに賛同したからなのだ。

そして私たちはいま、カンボジアに小学校を建てる準備に追われている。教育とは時間がかかるものではあるが、出来ることから始めたい。今年もクリスマス、そして新年をプノンペンの安ホテルで迎える私の仲間がいる。不況で女子の就職戦線はどしゃ降りといわれるが、積極的に海を渡り、就社ならぬ真の就職を考える学生の姿はすばらしい。むしろ、その多くは国内で就職するのだろうが、出会ったアジアの女性たちを忘れるなどということはなく、必ず関係を発展させて行くだらう。それが地道に長年に亘ってボランティア活動をして来た先輩NGOから教えられたことなのである。

いまを共に生きて行く。アジアの女性たちとの交流は、そこが原点なのではなかろうか。

典型的な素人ボランティアグループではあるが、若い仲間の輪を拡げることが、同じアジア人としての私たちのささやかな運動である。



## フォーラムの財団法人化

アジア女性交流・研究フォーラムは、平成2年（1990年）10月の設立以来、アジア地域の女性の地位向上を目指す常設の機関として、交流や研究などの活動を行ってきましたが、本年10月1日をもって、労働省認可の財団法人となりました。

10月1日には、財団法人として初めての理事会と設立総会を開きました。理事長には、引き続き高橋久子が選出されました。また、財団法人化を記念したレセプションには、国県市の行政機関や女性団体など各界から多くの皆様がお祝いに駆けつけてくれました。

フォーラムの財団法人化は、一つには3年間の活動の積み重ねの結果であり、また一つには、活動により得られた広範なネットワークやフォーラムを支援してくださった皆様の熱意の成果です。フォーラムは、その使命と意義をさらに深く認識し、活動の一層の充実を図っていきます。

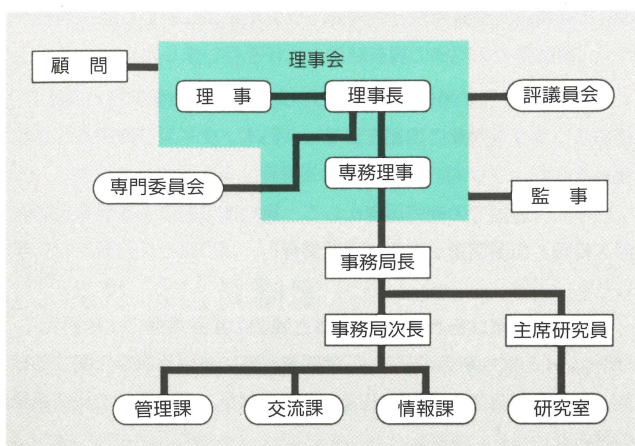


▲設立総会

## フォーラムの目指すもの

フォーラムの目的は、アジアの人びとと共に女性問題について考え、共に発展していこうというものです。21世紀の社会の安定と発展のためには、私たち一人ひとりの主体性が尊重され、その能力が発揮されなければなりません。そのため、アジアの女性たちが社会に評価され、国の開発にも積極的に参加していけるよう国際的な連帯を図ります。

## 組織図



▲理事会

## フォーラムの活動

女性問題に関する調査研究、アジア諸国との相互理解を促進する交流・研修事業、情報の収集発信とネットワークの形成が、フォーラムの活動の三つの大きな柱です。北九州市内はもとより、全国各地で事業を展開しています。また、「開発と女性」（WID）に取り組んでいる国連婦人開発基金（UNIFEM）の日本国内委員会の設立に参加するなど、グローバルな視野を持って活動を進めています。

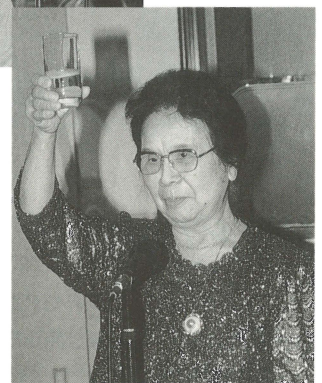
4～5ページに具体的な活動をご紹介します。



▲理事長 高橋久子



▲末吉興一北九州市長



▲石田ヒロノ募金委員会会長



▲レセプション



# フォーラムの活動紹介

## 交流・研修

### 1. アジア女性会議——北九州

「交流」と「研究」を統合するフォーラムの主要事業として、「アジア女性会議—北九州」を開催しています。この会議は、アジアの女性たちが抱える問題を共に考え、アジア諸国との相互理解と国際交流を通じて女性の地位向上を図るために開催するものです。会議では、第1回：アジアと女性の今、第2回：政策決定における女性、第3回：環境と開発と女性、第4回の今年は「地球の未来と人口」と、「開発と女性」の視点から極めて重要であり、かつタイムリーなテーマを取り上げています。

国内外のパネリストを迎えての国際シンポジウム、研究発表会、ワークショップ、アジアバザール、市民交流会など多彩なプログラムに毎年、北九州市民をはじめ、全国各地から1,500人が参加します。



▲国際シンポジウム

### 2. アジアセミナー

毎年6～8月に、アジアやアジアの女性問題に対する理解を深めるため、市民向けに連続公開セミナーを開催しています。

内外の専門家を講師陣に、アジアの女性の労働問題、開発と教育、日本のODAの在り方、熱帯林保護などさまざまな視点から、アジアの問題に迫ります。



▲セミナー受講者



▲行政官セミナー 乳幼児の保健衛生プログラム

### 3. 女性の地位向上のための行政官セミナー

JICA九州国際センターの委託を受けて「女性の地位向上のための行政官セミナー」を行っています。このセミナーは、「開発と女性」の視点からプログラムされ、女性の地位向上のための各種の女性施策について、アジア・太平洋地域、アフリカの行政官を対象に研修を行うものです。研修は、女性行政プランニング論をはじめ、保健衛生や母子福祉から学校教育、障害福祉教育、農村生活改善まで多様な科目を取り入れ、女性行政担当官の行政能力の向上を目指しています。また、各国の貴重な情報交換の場ともなっています。

## 調査・研究

### 1. 家族に関する共同研究

アジア各国の研究機関と共同で、経済開発に伴って女性や家族の意識がどのように変化してきたかについての調査・研究に取り組んでいます。

1991年は韓国女性開発院と共同で、ソウル市民に対して面接調査を行い、福岡県での同様の調査結果と比較を行いました。

また昨年は、タイのチュラロンコン大学社会調査研究所と共同で、首都バンコクを対象に調査を実施し、日本、タイ及び韓国との比較をしました。

さらに、韓国での補完調査として、農村部における家族意識の変容を韓国・忠清南道と全羅北道で調査し、ソウルとの比較を行いました。

これらの結果はそれぞれ、「日本と韓国の家族意識の比較研究」、「現代タイの家族意識の研究」、「韓国農村部における家族に関する研究」として報告書にまとめ出版しているほか、全国各地で研究結果の報告を行っています。



## 2. プロジェクト研究

フォーラムの専門委員会は「WIDに関する研究会」をつくり研究活動を行っています。研究会は、リサーチグループとメディアグループに分かれます。リサーチグループはフィリピンで都市生活者に関する調査を行い、メディアグループは「東南アジアの女性と仕事」というテーマで、フィリピンとマレーシアで取材を行い、その結果をビデオに編集しています。



▲専門委員会のフィリピン調査

## 3. 環境問題意識調査

環境問題に対する意識が世界的に高まる中、公募で選ばれた、中学生の子供を持つ母親2名と一緒に、日本（北九州市）、中国（北京市）、韓国（ソウル市）の3都市で「地球環境と暮らしに関するアンケート調査」を実施しました。この調査は、各都市の中学生とその母親に対して、環境問題に対する認識や環境を守るための努力などについて調査を行い、環境問題への関心を比較するものです。

### 情報

## 1. 情報誌「Asian Breeze」の発行

情報誌「Asian Breeze」を年に3回（日本語版5,000部・英語版3,000部）発行しています。

Asian Breezeには、フォーラムの活動やアジアの女性の状況、国内・国外でアジアの人びとや女性を支援するために活躍している団体の紹介などさまざまな情報を集約し、国内はもとより世界各国に情報を発信しています。

## 2. 海外通信員制度

今年で3期目になる海外通信員制度は、アジア諸国の在住者に、日常の暮らしの中に見られる女性の姿、生き方を、年4回のレポートに綴ってもらう制度です。通信員は公募で選ばれ、任期は1年です。



当初、6か国6人でスタートしましたが、昨年は13か国19人、今年は12か国16人と大幅に増員。これまで情報が少なかった国とも幅広いネットワークが結ばれつつあり、海外通信員は、フォーラムとアジアを結ぶ重要な掛け橋となっています。

レポートは「Asian Breeze」に掲載するほか、「海外通信員レポート集」として出版しています。

## 3. アジア女性シリーズの出版

アジアは、民族や宗教、政治、経済などのどれを取っても非常に多様な地域で、相互理解や国際協力を進めるためには、国の状況を客観的なデータによって知ることが大切です。

「アジア女性シリーズ」は、各国の女性問題担当国内本部機構（ナショナル・マシナリー）から、統計資料の提供や原稿執筆などの協力を得て、女性の実態や女性を取り巻く社会状況を国ごとに紹介していくものです。

第1回配本は「中国の女性」で、婚姻、教育、労働、女性に関する政策など、さまざまな局面から女性の姿を紹介しています。第2回配本は「スリランカの女性」で、来年3月出版の予定です。

## 4. 図書収集

国内・国外の女性問題や、アジアの文化、政治、経済、宗教などに関する図書や資料を収集し、コンピュータによる管理を導入して、図書コーナーとして整備を進めています。現在、和書3,000冊、洋書700冊を収集しています。

## 5. 女性情報マトリックス

マトリックスとは、縦横に網の目のように伸びる行列を意味します。

女性情報マトリックス事業は、海外通信員をキーパーソンとして、北九州市民とアジア諸国の人びととの有機的なつながりを強め、交流や情報交換を促進し、相互理解を深めることを目指すものです。

テーマは「女性と教育」。教師、PTA代表、マスコミ関係者、研究者など、いろいろな分野で活躍している北九州市民が、アジア各地のフォーラム海外通信員、政府、NGO、個人家庭などを訪問し、女性と教育について調査・研究しました。今年は、中国とスリランカで女の子の生活をビデオ撮影し、小学校用教材として編集をしています。



## 全国事業を展開 ――「開発と女性」セミナー――

フォーラムでは、女性問題の解決に向けて女性たちのネットワークの強化を図るため、全国展開事業として7月14日～7月17日に、堺市、広島市、北九州市の3都市で「開発と女性」セミナーを開催しました。講師には「開発と女性」(WID)問題の専門家で、「国連婦人の十年」最終年のナイロビ世界女性会議の準備チームのメンバーとして国連で活躍した米国ミネソタ大学のバーバラ・クヌードソン教授をお招きしました。

堺市では、堺市女性団体との共催により、また、広島市では、広島市、(財)広島県女性会議との共催により、それぞれセミナーを行い、「開発と女性」問題について認識を深めるとともに、交流の輪を広げました。

北九州市では、フォーラムが毎年開催しているアジアセミナーの特別公開講座として、「アジア諸国の開発と女性たち」をテーマに約150人が参加してセミナーを行いました。



▲バーバラ・クヌードソン教授(左)

ここで、アジアセミナーの特別公開講座として行われた講義の内容を紹介します。

アジアでは、他の地域と比べ経済開発のレベルが実にさまざまです。多くの場合、アジアの隣人たちは大変な困難を抱えており、日本の女性は、開発の課題に取り組んでいく重い責任があります。

もし、世界のすべての国が女性の役割、意見、貢献を正しく認識しないならば、世界の貧しい国ぐにが近い将来において納得のいくレベルの経済的、社会的開発を達成することはないでしょう。その意味で、開発と女性(WID)とは、女性の地位向上だけでなく、地球上のすべての人間の生活の質的向上に関わるものです。

さて、開発問題との関連で、世界が今直面している最重要課題と言えば、①爆発的人口増加の抑制、②世界の飢える人びとへの食糧供給、③すべての人間に脅威を与える環境破壊の予防、④戦争の脅威の一扫です。これらの問題について、女性の視点から分析することによって、より本質が見えてきます。

人口問題を例にとると、これまで、私たちは避妊の情報や避妊具を提供することで人口増加を抑制しようとしてきましたが、この方法は、

最貧国ではあまり成功しませんでした。なぜなら、それらの国では、女性は1日14～16時間も自給のためだけに農作業をしたり、あるいは社会保障制度が十分でないため、多くの子供を必要とするという事実を見落としてきたからです。その解決のためには、開発援助を集中的に女性の教育に投資するのです。より教育のある女性は子供を多く産みませんし、乳幼児期に死んでしまう子供も少なくて済みます。さらに国家にも大きな経済的貢献をします。

また、食糧問題についても、食糧危機が深刻な地域では、女性の大半が農業に従事しているにもかかわらず、女性は新しい農業技術の情報を受けることがあまりなく、肥料や農耕具などを買うためのローンも拒まれていきます。女性の視点に立った分析を通じて、はじめてこうした問題点が浮き彫りになってきます。そして、人口問題にしる、食糧問題にしる、あるいは環境問題にしる、これら最重要課題は相互に深く関連しています。

では、その解決のために、女性は何をすべきなのでしょう。その戦略としては、まず、毎日のように発表される豊富な新しい知識を通して、過去、現在、未来の女性の地位について学び、女性たちが直面している課題をよりよく理解し、考えを分かち合うことです。次に、世界を新たな方向に進めるべく女性が一丸となって行動できるように、効率的に組織化することが必要です。さらに、より豊富な知識と組織力をもって、実際に行動することが何より大切です。私たち女性は、政治的影響力を獲得する方法を見出し、意見を聞いてもらい、女性独特の考え方を、人口安定化、食糧確保、地球環境保全、恒久的世界平和といった現代の重要課題に反映させなければならないのです。



▲水道のパイプラインのための掘削作業(ネパール)



## 海外通信員レポート

テーマ：教育と女性

### インドの女性教育 Malavika Karlekarさん (インド)

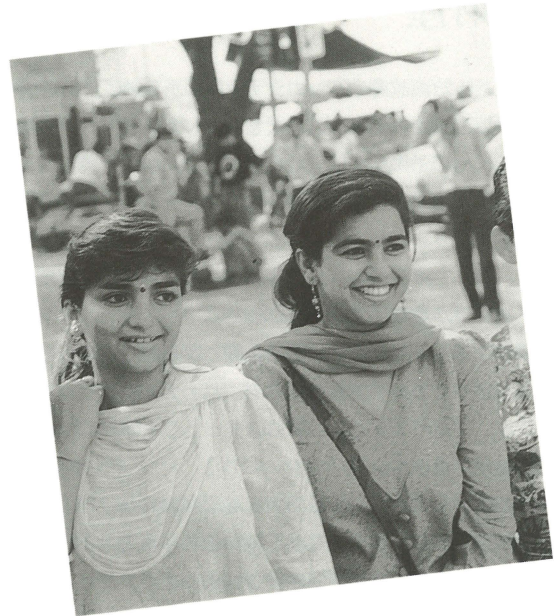
社会経済的背景の如何にかかわらず、女性であることの理想と、近代的教育の理想とはしばしば矛盾します。家族の生存と結束を考えると、家族とは、女性が子供を育てたり従順であったりする側面の上に築かれています。そして、それは、独立の思想や探究心とは反することが多いのです。中流の家庭は女の子を一定の教育コースに入れますが、大部分の家庭は、女の子を学校に行かせ家事労働をさせないことは無駄なことだと考えます。労働の役割分担によれば、家事労働は、女性や少女に重く割り当てられるのです。

貧しい家庭の生活を維持することは、子供や女性が働くことにかかっており、2～3年の教育に依存することはほとんどないのです。学校に行けば、お金を稼いだり、親たちが家庭や外で生産活動をする間、家事を手伝う時間がなくなります。女の子の主な仕事の一つは、弟妹の面倒を見ることです。男の兄弟が遊んだり学校に行ったりしている間に、村においても都市においても、女の子は母親の役割を始めるのです。

学校に行くことができた少女でさえ、その後継続できるかは、15歳を過ぎてする結婚、学校が行きやすく安全なところにあるか、女子校か、先生が女性か、ニーズに合ったカリキュラムであるかにかかっています。奨学金、給食、無料の教科書なども動機付けになります。建物や備品などの施設も影響します。インドでは大部分の学校で、これらの面が欠けていることが指摘されています。小学校に付属、または隣接する託児所や保育園があれば、職業クラスの少女の託児が満たされ、学校への登校率が改善されるでしょう。

運よく大学に進学できた少数の女子(およそ男子100に対して女子40)のほとんどは、教養学部(43.2%)と教育学部(52.4%)に集中し、技術工学の大学に行く人は、男子100に対して女子はわずか6です。学問以外の要因や状況が、10代後半の女性たちの選択に大きな影響を与えます。これらは、人生において女性の基本的な役割は何であるべきかという社会や家族の期待に関係してきます。つまり、女性はよき妻になり、献身的な母親になるべきであり、働くならば先生か事務員で、従って、科学やそれに関連する分野の勉強に時間と労力を費やすのは無駄であると考えられています。家庭のわずかな蓄えは男の子の技術教育に使われます。たとえ女のきょうだいに同等の素質があったとしても、女の子は通常伝統的な女性らしいコースに入れられます。

しかし、社会や家族の考え方は、ゆっくりとではありますが変化しつつあります。社会環境の変化もまた、女性の教育を推進する方向へと向かい、さまざまな研究機関レベルで積極的な取り組みを進めています。女性を犠牲者とする考え方から、女性に力を与えるという考え方に変えるべきだという認識が高まってきました。このようなダイナミックな考え方によって、肯定的な自己イメージ、自信、批判精神、集団の中で働き決定を下す能力などが養われることと思えます。



### 女性への法律教育

Zhou Jieさん  
(中国)

1992年、中国で初めて、女性の権利と利益を守るための法律ができました。以来、この新しい法律を学ぶためのキャンペーンが国中で始められ、法律研修コースの開設、書物、ラジオやテレビの番組が目白押しです。また、弁護士の中には組織をつくって街頭で相談所を開き、新しい法律を解説したり、女性の法的権利についての質問に答えたりする人も出ました。

その結果、多くの女性が、不当な扱いに対して泣き寝入りすることなく法的手段に訴えることを学びました。たとえば、黒龍江省のある発電所が新しい社宅を建てるため、女性の従業員に2倍の抛し金を支払うよう要求したとき、彼女たちはこれを拒否し、夫や親戚や何人かの理解のある上司に頼るのではなく、女性の權益保護法に救済の道を求めました。彼女たちは118人の女性の署名を添えて、中華全国婦女連合会に電報を送って訴え出しました。彼女たちは、法第23条によると「女性は宿舍の割り当てや福利厚生などの取り扱いについては男性と平等であるべきだ」とされていることを教えてもらっていたのです。

ついにこのケースは、女性たちの満足のいく形で解決することができました。彼女たちは、男女平等のための法的保障をじかに知り、法律に関する教育を通して十分な恩恵を受けることができたのです。

この新しい法律は、女性は男性と同等の権利を持つことを明記してはいますが、雇用、教育、福祉、保健などにおいて、まだ多くの不平等が存在しています。たとえば、大学卒の女性の雇用を拒否している会社もありますし、たとえ女性を雇用しても、男性を優遇しているところもあります。女性を拒否している職場は、女性が出産のために休みをとることを恐れているのです。男性の従業員にしか宿舍を提供しないところもありますし、女性の申込み者に対しては、条件を厳しくしているところもあります。

何世紀にもわたる性差別の結果である不平等は、中国の女性にとって頭痛の種です。古くからある偏見をぬぐい去ることは、決して容易なことではありません。私たちは、まだまだ、誰もが法律を守るよう教育していかなければなりません。



## 教育は財産

Estrella M. Maniquisさん  
(フィリピン)

私が小学生だった頃故郷のパンガシナン州のナティビダッドでは、学校まで2km以上歩かなくてはなりませんでした。公共の乗り物はほとんどなく、村の子供たちはそれらを利用するお金も持っていなかったからです。級友たちと同様に、私はアスファルト道路の路肩の泥道を裸足で歩きました。雨季には、道は小川ようになります。私たちは皆、喜んで跳びはねながら、レインコートを着た褐色の身体にノートをしっかり抱いて帰宅しました。

授業や宿題は楽しくなくても、広い校庭で遊んだことや、わずかな小遣いをもらってお菓子を食べたこと、バナナの皮で包んだ弁当を食べたこと、友達ができたり、時には失ったりと学校には多くの楽しい思い出があります。

私たちは簡単な教材と先生たちの大変な忍耐のおかげで、読み書きや計算を学びました。机だけでなく教科書も共有で、1日の授業が終るとそれらは集められ学校に保管されました。コンピュータやビデオなどは、私たちの想像も及ばない別の世界のものでした。

このように物質的には恵まれていなかったのですが、クラスの生徒はほとんど全員が学年末までやり遂げることができ、次の学年へと進級しました。貧しくても、フィリピンの親たちは教育が豊かさへとつながると考えており、できる限り子供が教育を受けられるよう努力します。

しかし、退学する生徒も確かにいました。優秀な成績であったのに、農家の仕事を手伝わなければならない、高校3年でやめていった上級生の男の子のことは、私は特に悲しく思いました。

女の子たちもまた、母親が野菜を売りに行くとときや田植えや刈り入れの仕事をするとき、弟や妹の世話をしなければならないので、ときどき欠席しました。欠席がひんぱんになると、女の子は勉強に対する興味を失いがちでした。

村には、全く学校へ行かなかった子も何人かいます。その子の家庭はあまりにも貧しく、子供たちがお金を稼いで助けないことには食べていけなかったのです。小学校は義務教育でしたが、学校へ行かなくても誰からもつかまえられたり怒られたりはしませんでした。それは1950年代から1960年代のことです。

公式の統計によると、1970年から1990年までにフィリピンの識字率は大変向上し、それは学校の出席率の高さに反映されています。1970年の識字率は女性で75.9%、男性で76.9%でしたが、1990年には女性は93.34%に、男性は93.7%になりました。男性の識字率の方が女性よりもわずかに高いのですが、女性の識字率の上昇率は男性のそれを上回っています。

7歳から19歳までの男女とも、学校の出席率はこの20年間で2倍に増えました。注目すべきことは、どの学年も最後まで履修し終えることができない女子生徒が減ったということです。その割合は、1970年には5%でしたが、1990年には3%に減りました。

女性で大学の学位を持っている人の割合も増えました。女性は1970年の2.7%が1990年には3.8%に増加しました。一方、男性は1970年には2.0%、1990年には2.8%となっています。

私の知っている家族をいくつか観察してみようと思うのですが、学位を取ろうとより一生懸命頑張っているのは、男の子よりも女の子たちであるように思えます。彼女たちはまた、自分の選んだコースを変更することもなく、所定の年限内に終了しているようです。

## ある少女の選択

國本綾子さん  
(バングラデシュ)

シウリは今年17歳。昨年バングラデシュにおける10年間の基本教育を終え、1級の学習終了証明書を持っています。この証明書を持っていれば、女の子の場合、日本で言うなら高校卒業程度の価値があり、このまま結婚というケースが多いようです。ところが、シウリは次の教育段階へと進みました。彼女にも、やはり例外ではなく、結婚話がいくつかありました。

17歳と言えば、日本ではまだまだ精神的に子供です。しかし、バングラデシュの女の子たちは、この年齢になるまでに、家族の世話をし子供を育てる基礎を身に付けさせられます。彼女たちは、幼い頃から母親について台所仕事を手伝います。母親は、危ないからあっちへ行きなさいは決して言いません。実際5歳になるリーナも、シウリやその母親について台所仕事を手伝っているうちに、野菜の切り方、紅茶の入れ方、食卓の用意などをすっかり身に付けました。リーナは、母親の具合の悪いときには、父親が仕事から帰ってくると、お皿にご飯やおかずをよそって食べさせ、食後のお茶を入れることもできます。女の子たちはこうして幼い頃から家庭の中での女の役割を身に付けていくのです。

シウリは、台所仕事だけでなく幼い弟たちの面倒もよく見ます。朝食の準備をし、弟たちに食べさせ学校へ送り出し、それから自分も学校へ行きます。言われなくても、週に1度は、兄や弟たちの部屋の拭き掃除をします。夜は、弟や妹を自分の部屋に呼んで、自分も勉強しながら彼らの勉強も見ています。お客さんが来れば、たとえ次の日が試験でも、特別料理を母親と一緒に作ります。彼女自身の本当の時間は、一番下の弟を寝かせつけた後の夜11時からです。彼女は何の不平も言いません。本当なら、もうお嫁に行って子供の一人や二人いる年になっていることは彼女自身よく分かっています。姉も基本教育の終了直前にお嫁に行っています。また、クラスメイトも結婚し子供のいる人もいます。シウリは、姉や友人のケースを見て女の人生における疑問を持ちました。「年少で結婚し、妻になり、母親になるだけでいいのだろうか。また、子育てと妻の仕事と、そして学校生活は同時進行できるのか」。彼女は、反対する母親を説き伏せて、学校の先生になるために上の学校へ進んだのです。イスラム世界であるこの国で、女が外で仕事をするのは容易ではありません。でも、先生になる勉強をしておけば、仕事をするにしてもいいにしても、いずれは子供を育てる自分に役立つと考えたのです。社会の勢いに流されるのではなく、自分の意志で目的を持ち、学習を続ける彼女を心から応援したいと思います。また、反対しながらも新世代の生き方を見守る母親にも、心から拍手を送ります。



▲女の子は小さい頃から台所仕事を手伝う



## 女性たちの決意

Khalid Hyderさん  
(パキスタン)

パキスタンは開発途上にある国ですので、女性の地位向上のために割り合えられる資金が非常に限られています。女性の地位向上という問題は、政府の優先課題ではありますが、資金の不足と爆発的な増加を続ける人口のため、女性の地位向上へ向けての政府の対応は著しく制限されています。特に、教育面においてその傾向が強いようです。推定識字率はわずか35%で、女性の識字率は22.3%しかありません。パキスタンはこの地域で他の諸国に大きな遅れをとっています。特に女性の識字率はかなり遅れています。

1992年～1993年の経済調査によると、パキスタンには24,171の初等学校があり、1,410万人が就学していますが、女子の数はわずか8%です。この値はパキスタンで最後に国勢調査が行われた1981年の数字を基に推計した数値ですから、現状はもっとひどいという可能性もあります。

1992年12月に発表された向こう10年間の新しい教育政策の中で、政府は女性の教育に特に重点を置きましたが、割り当てられた資金は全く不十分なものです。1993年度予算案では、女性の地位向上に関しても女性1人当たり1.50ルピー(約10円)という不十分な金額しか割り当てられていません。教育への割り当て金もあまり励みになるようなものではありません。村の学校の中には、チョークなどの備品代として地方教育官から月にたった1.50ルピーしか給付されないところもあります。しかし、このような苦境の中においても、子供たち、特に女の子に教育を与えたいと固い決意を変えることがないのは、まさにパキスタンの女性たちの力であると言えます。

パキスタンの女性は、総人口の約48%を占めており、その大多数は農村に住んでいます。女性の大半は読み書きができず、早くに結婚をし、たくさんの子供を生みます。世界の多くの国では、女性は男性よりも人口が多く長生きしていますが、パキスタンでは違います。それに加えて、女性は、自分の人生を選択する自由を持たず、従属物としてみなされています。先に述べたように、ほとんどのパキスタンの女性は、基礎的な教育を受ける機会さえ与えられていません。この問題は、男女共学がほとんどの地域で、特に農村においては受け入れられておらず、男子校が女子校よりも優先されているという事実によって一層深刻なものとなっています。

このような逆境の中においても、農村部に住む多くの女性たちは、あらゆる困難に挑み、少なくとも基礎教育だけは子供たちに受けさせようと決意しています。多くの村では、女性たちは、当座の学校をつくるための共同出資を行っています。土壁でできた一部屋しかない自分の家を、2時間程提供するということもあります。壊れた窓は塗り直して黒板として使われ、子供たちは捨ててあったジュート袋の上に座って、基礎的な教育を受けるのです。3～4マイル離れた学校へ娘たちを通わせるため、通学の途中に娘たちが危険な目に会わないように、男の子のような格好をさせる母親もいます。都市では、何人の母親が、娘たちに基礎教育を受けさせるために、そのようなことまでさせるのでしょうか。

今後、女性たちは結束を固めて女性の地位向上と持続的な発展のために、その活動とエネルギーを注いでいかなければなりません。多くの人のひたむきな努力によって、女性たちは、男性優位の社会における受動的な犠牲者から、女性の地位向上を進める積極的な参加者へと変わっていくことができるのです。

## SAARC 諸国会議

Kamala I. Wickremasingheさん  
(スリランカ)

SAARC諸国(バングラデシュ、ブータン、インド、モルディブ、ネパール、パキスタン、スリランカ)における女性教育についてのワークショップが今年7月にコロンボで開かれました。ワークショップでは、女性の教育とその制約について検証するとともにアクションプランの検討を行いました。会議にはすべてのSAARC諸国が参加し、有意義な討議を行い連携を深めました。

会議は、女性に対する教育は政治的重要課題であり、人権に関する問題であると同時に、開発を行う上での必須条件であるという前提に立て行われました。教育は女性自身にとって利益があるだけでなく、国の発展にとっても必要なことです。教育によって女性の社会的地位が変わり、それは、女性に多くの力を与えることになります。また、国の発展には、女性を含むあらゆる人材の登用が必要であることを確認しました。これは女性が、政策決定からその実行までを含むさまざまな活動に参加できるよう保障することを意味します。特に、アジアのように女性が社会で二次的役割を果たしてきたようなところでは、教育は大きな役割を持つことになります。



▲SAARC諸国会議

会議では数多くの問題が討議されましたが、最も大切なものだけを以下にあげてみたいと思います。

- ① 女性に平等の権利と力を与えるために、政府とNGOが参加して識字教育の全国的なキャンペーンを行う。
- ② 女性と教育に関するあらゆるデータを分かち合う。
- ③ 特に地方において、女子の就学を促進するために、宿舍や女性用のトイレなどの設備を整える。また、入学手続きについても規制を緩和する。
- ④ 公教育に加え、ノンフォーマル教育や代替教育を行う。
- ⑤ すべての教師が知識や指導技術を備えるよう研修を行い、どの学年でも教えられるようにする。また、村の子どもたちを最も多く学校に入学させた者に対して賞を与える。
- ⑥ あらゆるレベルのカリキュラムや教科書から性的役割分担の固定観念を取り除く。女性のための科学、技術、数学教育などの共通のカリキュラムをつくる。
- ⑦ 訓練を実施するとともに、訓練を奨励することも重要。コースを男女別とするのは避ける。女性の職業訓練受講を促進するため、就職指導やガイダンスを行う。

また新しい経済環境の中での女性の地位についてや、人の移動が教育に与える影響について共同研究を行うべきであるという提案もありました。



## 海外情報 モンゴル

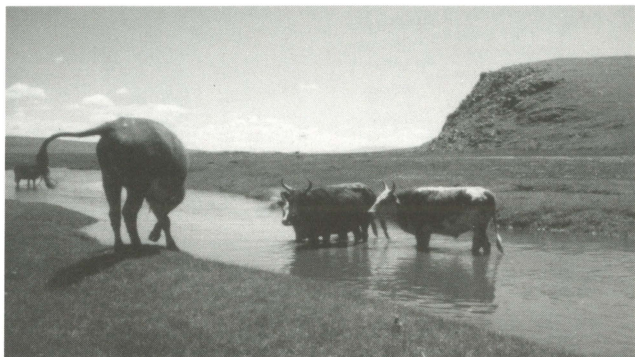
### モンゴルの自然と生活

新潟大学教養部助教授  
櫛谷圭司

モンゴル、と聞くと日本人は二通りのイメージを頭に描く。一つは大草原で馬や羊の群れを追って生活する遊牧民の姿。もう一つは、政治・経済の制度が変わって仏教やチンギスハーンが復権したが、経済的な困難に直面している市民生活。どちらも現在のモンゴルの状況である。

今年8月、初めてモンゴルを訪ねた。日本からモンゴルへ行くには、北京経由とロシアのイルクーツク経由の二通りがあるが、今回は新潟～イルクーツク便から乗り継いで首都のウランバートルに入り、南部のゴビなどを訪れた。

モンゴルの面積は日本の約4倍だが、人口は218万人しかいない。家畜はその10倍以上いるそうで、人口の約半分が牧畜業に携わっている。国土全体が内陸の高地にあるため、日本より気温は低く、空気はたいへん乾燥している。



国の南部は、東西2,500km、南北1,500kmにわたる広大なゴビ砂漠である。小型プロペラ機で約1時間半、滑走路のない平原にもうとうと埃をたてて着陸すると、砂漠というイメージとは違って、短い草が一面に生い茂る真っ平らな大草原である。ところどころにゲルと呼ばれる遊牧民の円筒形のテントが点在している。

ゲルの一つを訪問し、大歓迎を受けた。空気が澄んでいるせいか、隣のゲルが近くに見えるが、歩いたら1時間以上かかるそうだ。

人びとは厳しい自然に調和した生活を送っている。放牧される家畜は主に、牛、馬、ラクダ、羊、ヤギの5種類で、夏は草が豊富で水の得やすい場所へ、冬は山間部の風を避けられる場所へ、家畜とともに移動する。ゲルは容易に分解・組み立てができるようになっており、移動に備えて家具は少ない。

遊牧民にとって家畜は財産である。肉や毛を衣食住に用い、かつ商品とするほか、発酵させた馬乳酒を飲み、糞を燃料にする。一日は日の出とともに始まり、天候や風を考えて、よい草が生えているところに家畜を放牧に出す。小さな子供でもさっそうと馬を乗りこなし、家畜の群れを上手にコントロールする。

近年の民主化の動きの中で、家畜が国家所有から個人の財産に変わった。これは人びとに歓迎され、仕事の励みになったそうだ。モンゴルの人びとは、自然のリズムとの調和という、日本人が忘れてしまった生活形態を基盤にして、これからの発展を模索しているようである。



▲最近外国人の観光客も訪れる

### 女性と教育

モンゴル女性連盟会長  
Ms. G. Dashaa

#### 1. 女性と教育の現状

モンゴルの人びとは、この3年間に、生活のあらゆる面にわたって新しい政治システムを経験してきました。社会のあらゆるレベルに経済的危機の波が押し寄せ、それはまた、女性の教育にも影響を及ぼしました。この2年間に10万人の子供が中途退学をし、それによって女性の非識字率が上昇しました。退学者の多くは遊牧民の子供で、その内70%は中等学校の6年までにドロップアウトしています。

都市と地方の間で女性の基本的な教育レベルに大変な較差があることも問題です。18歳以上の女性で10年間の教育を受けた人は、都市では1,000人中228人であるのに対し、地方では110人です。

モンゴル文字の問題もあります。長い間モンゴル文字は無視され失われたままでしたが、今ではこの文字をよみがえらせることが大切になってきています。政府は、1994年からのすべての公文書にモンゴル文字を用いることを奨励しています。

#### 2. 改善のための提言

私たちはここで、モンゴルの女性の教育レベルを上げる方法を考えてみたいと思っています。

- ① 現在のモンゴルの教育システムは、ロシアの教育システムに従っていて、国としての特色やモンゴルの考え方や習慣を欠いています。市場開放経済と関連して、新しい教育スタイルをつくりあげることが必要となっています。特に、主婦や無職の女性たちへのモンゴルの伝統的なトレーニング方法であった家庭教育を組織立てることが大切です。
- ② 多くの子供たちが中途退学するという事は困った問題です。そして、教育を無視する風潮が社会にあふれています。私たちはもっと質の高い教育を行うべきだと考えます。特に、通信教育による遊牧民の子供たちに対する教育が重要です。
- ③ 女性に、家族計画、子育て、家計、経営技術、モンゴルの伝統や習慣などをノンフォーマル教育の場で教えていくことも非常に大切なことです。
- ④ 私たちは国の教育プログラムを確立し、公式、非公式の教育を通じてさまざまな教育方法をあみ出してきました。  
遊牧民たちは、都市から遠く離れて住み、1年に40～50回も移動する遊牧生活を送っています。従って中等教育や職業訓練を組織立てることが必要です。
- ⑤ 今日最も大切な問題は、家庭でモンゴルの古い文字を教え、トレーニング・コースをつくり、ラジオやテレビの情報を通してそれを広めていくことです。



## GLOBAL EYES — 世界の女性 —

## チリのワーキングウーマン

ソーシャルワーカー  
Ms. Inés Olivares G

チリの人口は、1,317万3千人、うち女性は666万7千人で、全体の50.6%に当たります。この20年間に女性の経済活動人口は急速に増え、今日、勤労者の3人に1人は女性です。女性が就くことのできる職業に制限はありませんが、雇用の状況を見ると、専門・技術職14.4%、管理職1.9%、事務16.0%、店員15.5%、メイド33.1%、技能・生産作業12.7%、などとなっています。チリでは、家計の主たる担い手が女性である家庭は、全体の21%です。

働く女性は、医療、賃金、手当、待遇など、法律上の保護があります。

また、母性の保護についても次のように規定されています。妊娠中は、産前42日、産後84日の休暇を取ることができ、この間の賃金や職など、すべての社会的、法的権利が保障されます。また、重労働や放射線を発する場所での仕事が禁止されています。

子供が生まれると、母親が働いている間、子供を世話してくれるところに預ける権利があります。また、生後1年間は、昼食時に1時間の授乳時間を取ってよいことになっています。生まれた子供が障害児の場合は1年間の休業が認められ、賃金をはじめすべての法的権利が保障されます。

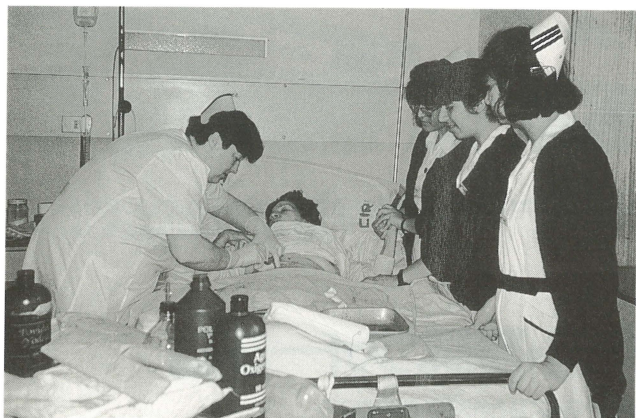
働く女性の子供は、21歳になるまで、毎月一定の額の給付金を受けます。

業務中にけがをしたり病気になった場合は療養保障があり、その間、職の保障と休業保障があります。

チリの法律は、女性の退職年齢を60歳と定めています。その後は死ぬまで毎月一定額の給付金が出ます。

世界中の女性がそうであるように、チリの女性もまた、家では夫や子供の世話や家事をしなければなりません。最近の調査では、外で働く時間の長い母親を持つ子供は、栄養失調、麻薬、アルコール中毒、登校拒否、放浪癖、売春、妊娠などの問題を起こす可能性があることが指摘されています。

また、母親自身も夫との間の意思の疎通がなくなり、離婚の危機にさらされています。しかし、このような現実にも直面しながらも、女性は働き、家計を助けなければなりません。



▲看護婦の研修

## フォーラムの窓

## 「学恩にて北京へ」

北京の9月は、空が抜けるように青かった。黄葉前のポプラが葉ずれの音を聞かすかのように、もうあまり強くない陽ざしの中で一日中揺らめいていた。そう、ソウル・バンコクでの家族意識の調査に引き続いて、今年は北京での共同研究の開始にこぎつけることができたのだ。信じられない程の順調さ。幸運を呪う嫉妬深い悪運につけこまれないよう、身を慎んで事にあたらねば、などと柄にもないことだけど古風な気持ち心が中をよぎる。

でもこれは単なる幸運のせいなどではなくて、先輩の学究からの学恩によるところが大きい。費孝通さんの「生育制度」ぐらいしか中国の家族研究を読んだことのなかった私は、この半年間、バンコク調査のまとめのかたわら、かなり精力的に現代中国家族研究の収集に努めてきた。けれど、現地での共同研究のパートナー探しとなると話は全く別である。研究計画はじりじりと遅れ始めていた。思い余って、日中社会学会の青井和夫会長にお願いしてみる。すると即座に、日本家族社会学の森岡清美会長とそのグループの方がたが、既にこの2年間、中国社会科学院の方がたと学術交流をなさっているから相談なさい、と勤めてくださった。私も家族社会学の会員なので、実はこの学術交流のことはお聞きしていた。けれども、そうした交流関係の中に、必ずしも研究目的が同じでないフォーラムの仕事のことで割り込む形になるのは厚かましい気がして、お目にかかる機会をたびたびあっても、口に出せないでいたのだ。青井先生に励まされ森岡先生にお電話する。

「それは是非おやりなさい。…私たちの学術交流は一応2年間で終わったところだから、もしフォーラムの共同研究の申出をすれば、先方にも大変喜ばしいことでしょう。私からも引受けるよう連絡しておきますよ」……電話口のこちら側で、私は思わず涙ぐみそうになる。先生からは、成城大学に留学中の王偉さんという大層日本語の上手な若い社会学者を紹介していただき、遅れていた研究計画は一気に前進し始めたのである。謹厳誠実な先生はその後すぐに、社会科学の婚姻家庭研究室の馬有才先生にお手紙を出してくださった。学縁・学恩という言葉が、改めて確かな輝きをもって私の心の中を照らし出した気がする。

以降、馬有才先生と、同じく婚姻家庭研究室の王震宇さんのお二人を中心とした共同研究が具体的に進み、北京そして中国でも恐らく初めてランダム・サンプリングによる調査ができる見通しである。中国は理想的な社会主義社会を建設したのだから社会科学は不要、とされた文革時代までの空白を埋めようとするかのように、中国側の意気込みには迫力さがある。楽しさと緊張の毎日が続く。

アジア女性交流・研究フォーラム

主席研究員 篠崎 正美



# INFORMATION

## ●第4回アジア女性会議ー北九州

と き：平成5年(1993年)11月19日(金)～21日(日)

ところ：北九州国際会議場(北九州市小倉北区浅野3-9-30)

テーマ：地球の未来と人口

アジア女性会議ー北九州は、アジア諸国の女性たちが抱える問題を共に考え、これらの国々との国際協力を通じて、アジアの女性の地位向上を図るために毎年開催する会議です。

今回は、地球の未来にとって大きな課題である人口問題をテーマに取り上げました。

現在、開発途上国では、爆発的な人口増加による環境の悪化、食料危機、都市への人口集中など深刻な問題を抱えています。一方、先進諸国では、出生率の低下による労働力の減少や高齢社会の進行が問題となっています。

そこで、こうした複雑な問題を抱える人口問題について、開発の視点からその構造的要因を探るとともに、女性の人権、生命の尊厳、地球の未来について考えていきます。

## ◆プログラム

### 11月19日(金)

17:30～21:15 アジアシネマ

「恋する年頃」(タイ)、「シャローム! ガールズ」(イスラエル)

### 11月20日(土)

14:00～17:00 国際シンポジウム

<パネリスト>

デヴァキ・ジャン(社会問題研究所長、インド)

ソンボン・パットウィチャイポー(タイ家族計画協会理事長、タイ)

樋口恵子(東京家政大学教授、評論家)

阿藤 誠(厚生省人口問題研究所長)

岩崎駿介(日本国際ボランティアセンター特別顧問、筑波大学助教授)

<コーディネーター>

原ひろ子(お茶の水女子大学教授)

13:00～18:00 アジアバザール

17:00～17:50 市民交流会

18:00～20:00 ワークショップ

### 11月21日(日)

9:30～10:00 AWID国際フォーラム参加報告会

10:00～16:00 「研究と討論」(自由発表部会、テーマ部会)

参加者申し込み、お問い合わせはフォーラム(093)551-1220まで。

## ●北九州市女性プラン後期施策

北九州市では、女性に関する施策を総合的に推進するため、平成2年(1990年)3月に、男女共同参画型社会の形成を目指す「北九州市女性プラン」(計画期間：平成2年度～平成11年度)を策定しました。前期計画期間(平成2～6年度)の終了に伴い、社会状況の変化等に対応するため、プランの見直しと後期具体的施策の策定を来年度中に行います。

市長の私的諮問機関である「北九州市女性行政推進会議」では、前期計画の進捗状況を踏まえて新しい施策に盛り込むべき内容について審議を行っています。

20人の委員は、月に1回のペースで会合を開き、来年4月に市長に対して提言を行う予定です。

## 編集後記

レンズを通して見る景色は、実際の情景とは少し異なる場合があります。撮影技術で見違えるほど美しく写ることもありますし、その反対もあります。今号のモンゴル特集の写真には、雄大な自然の中に立ったときの感動を写せなかったことのもどかしさがコメントで添えられていました。

Asian Breezeも、より正確な情報の発信を心がけていますが、読者の皆さんの夢縁に触れる情報でもありたいと思います。(S)



※Asian Breezeに対するご意見やご感想をお寄せください。

※掲載記事などの無断転載・複写を禁じます。



財団法人 アジア女性交流・研究フォーラム

〒802 北九州市小倉北区浅野3丁目9-30 北九州国際会議場8F

PHONE(093)551-1220 FAX(093)551-7535